愛用のトランペットを手に、熱い音楽談議をかわす外山さん（右）と忠津さん

一昨年の秋、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が4月30日を「国際ジャズの日」に制定するなど、近年、世界的にジャズへの関心が高まっています。今回の「トーク2013」は、ジャストランペッター・外山喜雄さんの登場です。忠津佳明副会長との〝トークセッション〟（対話の共演）は「ジャズとの出合い」「音楽の力」などをめぐり、即興演奏のごとく、流れるように展開しました。

TALK トーク 2013

# 音楽には人と人を結ぶ力が！

## 〝原点〟忘れず〝精神〟を継承

ジャストランペッター　外山 喜雄さん

とやま・よしお　1944年生まれ。ジャズ・トランペッター。20世紀を代表するジャズ・ミュージシャンである、ルイ・アームストロングの研究家として知られ、〝日本のサッチモ〟の異名も。「世界で活躍し『日本』を発信する日本人」として、昨年、妻の恵子さんと共に、国家戦略担当大臣から感謝状を受けた。

### サッチモの前で演奏!?

忠津　一昨年9月、「第33回日本大震災」で被災された宮城県石巻市のご夫妻の体験が、聖教新聞に掲載されました。お二人にあった二文字が、妻は、外山さんご夫妻の富士からの引用されたものでした。

外山　それは大変に光栄です。池田先生のその著作は、私も読ませていただきました。私が敬愛するルイ・アームストロングの音楽を紹介されていることを知り、とても嬉しく思いました。

忠津　ジャズ発祥の地である、アメリカのニューオーリンズには、にぎやかなジャズ演奏で故人を送る風習があるそうですね。

外山　ジャズに魅了され、私がアメリカへ渡ったのは1968年（昭和43年）、当時24歳でした。現地に着いて1週間、ただたないうちに、まさにそうした葬送のパレードに遭遇したのです。日本の葬儀とは全く異質の、皆が音楽で追悼の意を表す光景は、一生忘れられません。

忠津　何がきっかけでジャズに興味を持たれたのでしょうか。

外山　〝入り口〟は「グレン・ミラー物語」などのジャズ映画でしたが、強烈なインパクトを受けたのは、ルイ・アームストロングです。来日公演では楽屋へ押し掛け、無線にも彼の目の前でトランペットを吹かせてもらったんです（笑い）。今、思えば無鉄砲なことをしたものですが、それも若さの特権だったのでしょうね。

忠津　先月、「第33回サッチモ祭」（サッチモはルイ・アームストロングの愛称）で、外山さんの演奏を楽しく聴かせていただきました。サッチモの独特の歌唱法がどのようにして生まれたか、実演しながら紹介されていました。

### 〝恩に報いる〟生き方を

忠津　「日本ルイ・アームストロング協会」が、ルイ・アームストロング財団の日本支部として創設され、明年で20周年。この間、ニューオーリンズと日本を結ぶ交流を続けてこられました。とりわけ、次代を担う青少年の交流に焦点が当てられていることに、未来への希望を感じます。

外山　長年、ニューオーリンズの子どもたちに楽器を贈りました。私自身が若き日、多くの人にお世話になったアメリカ、そしてジャズそのものへの恩返しの思いを込めて、取り組んできました。

忠津　日蓮大聖人は、「恩を知ることを最高とし、恩を報ずることを第一としてきた」（御書491ページ、通解）と仰せになり、名誉会長も、「仏法の根幹、人間の根幹の道は『恩』である」と、常々教えてくださっています。多くの方が外山さんの考えに共感し、協力されているのも、外山さんの行動の根底に〝恩に報いていこう〟という尊い志があるからではないでしょうか。

外山　過分なお言葉に感謝します。ボランティアの活動ですが、〝ジャズ発祥の地の子どもたちに！〟との思いに賛同し、ミュージシャンやジャズファンだけでなく、楽器店や運送会社など、多くの人たちが支えてくださいました。おかげで、これまでに贈った楽器は、800本を超えました。

忠津　その過程で、ニューオーリンズの町がハリケーン・カトリーナに襲われるという、悲しい出来事もありましたね。

外山　そうです。2005年のことでした。私たちは即座に〝復興コンサート〟を開催し、支援の手を差し伸べました。

忠津　ウェイン・ショーター氏は、「二十一世紀における音楽の役割とは、人々に、人生のあらゆる課題に挑戦し、自ら持つ生命の傾向性やネガティブ（否定的）な側面に真正面から立ち向かい、勇敢に、前に踏み出すよう励ますことである」と述べています。外山さんを中心とする貴協会の行動は、まさにショーター氏の言葉を裏付けるものと思います。

## 青少年の交流が新時代開く

副会長・葛飾総区長　忠津 佳明さん

ただつ・よしあき　1954年生まれ。東京・葛飾区で青年部長、区長等を歴任。下町地域で培った人情味あふれる人柄で、メンバーの激励に奔走してきた。敏して一人の人を大切にする、面倒見の良さに定評が。青年部時代には全国各地の文化祭で、組み体操などの企画や音楽演出に携わった。副会長。葛飾総区長。

先月29日、都内で行われた「第33回サッチモ祭」で、「外山喜雄とデキシーセインツ」が軽快なメロディーを奏でた（右から2人目のトランペットが外山さん。左端のピアニストが妻の恵子さん）

### 大震災後に友情の証し

忠津　一昨年3月の「第日本大震災」では、地盤の液状化現象により、千葉県内のお住まいが大きな被害を受けられたとか。

外山　そうなんです。ところが、地震から数日後、ニューオーリンズから被災地支援を申し出る連絡が何本も入って来て、わが家の復興が後回しに（笑い）。そして、今度はアメリカから日本の子どもたちに楽器が届き、宮城県気仙沼市の避難所でコンサートを開催することができました。

忠津　心洗われるエピソードですね。

外山　昨年はアメリカの子どもたちが東北へ。今年の夏には東北の子どもたちがアメリカへ。こうした音楽交流を通じ、文化や言葉の壁を超えて、子どもたちの友情がさらに深まっていくことを願っています。

忠津　「ジャズには国を超え、世代を超えて、魂を結び合い、奮い立たせずにはおかない大きさがあり、深さがあります」――そう語る名誉会長は、自ら開人費用を工面して楽器を贈り、学会の音楽隊・鼓笛隊を創設されました。さらに、音楽や芸術文流を推進する文化団体として民主音楽協会（民音）を設立され、今月8日には創立50周年の佳節を迎えます。

外山　それは大変にめでたいことでございます。音楽で人と人とを結ぼうとされている池田先生の行動には、深い共感を覚えます。ジャズは自由な音楽ですが、その一方で、私は〝原点〟を大切にしたい。それが、私にとっては、ニューオーリンズであり、サッチモなんです。サッチモが目指したものを忘れず、これからも楽しく、演奏活動を続けていきます。

忠津　来年の民音公演で、ニューオーリンズのバンドの来日計画があるそうですね。

外山　奥はドラムのメンバーは、私がアメリカで修業中に出会った、当時10歳だった少年なんです。立派なドラマーに成長し、うれしく思います。

忠津　私もぜひ、会場に足を運ばせていただきます。

外山　ぜひともお越しいただき、本場のジャズを楽しんでください。愉快なリズムで、一緒に〝スイング〟しましょう（笑い）。